



キャプションを入力してください。

青く澄み渡る頭上の空で真夏の太陽が照り輝き、その太陽光を反射して輝く青い海の光景が水平線に広がるビーチ。

多くの人が砂浜に集い水辺ではしゃぐ賑やかな真夏の海の景色の中で彼女は、派手な豹柄で布面責の極端に少ないビキニを着た本城蘭子は砂浜に紫のシートを浜辺に引いて暑い日差しと涼しい潮風を体全体で浴びていた。

蘭子がいる場所は人だかりや騒がしさからは少し離れた場所で、その辺りにはシートを敷いたりビーチパラソルを設置している人は殆どいない。代わりに言うては何だが近くに複雑に入り組んだ岩場が存在していた。そして蘭子は一人というわけではなく、二人の軽薄そうな男と共にいた。

「へえ～、じゃあさあ、蘭子ちゃん一人で来たんだ～」

「そうそう。この前は幼馴染と来たんだけどさ～、今回はじっくり楽しみたいくなってね」

蘭子は今日この熱気と活気が渦巻くビーチまで一人で来て、二人の男たちとはつい先ほどその辺りで話しかけられた初対面である。

男たちから声をかけて来て、その軽薄な言葉とニヤつく笑顔の裏に隠された下心を目ざとく感じ取った彼女は同様の笑みを浮かべて男たちと共に過ごすことを受け入れたのだ。

「でもラッキーだったわ！ 蘭子ちゃんみたいな可愛い子と遊べるとか今日逃さなくてラッキーだわ！」

「あはは！ お兄さん口上手いねえ。誰にでも言ってるっしょ？」

「そんなことねえって。マジで蘭子ちゃん可愛いからさあ～。俺らテンションアゲアゲなんだぜ？」

シートの中央に足を投げ出して座る蘭子を挟むようにくつろぐ二人の男。肌はこんがりと黒く焼けており髪は薄い茶色や金髪で、筋肉は大きく隆起している。

いかにも遊んでますという風貌の男たちに男に声を掛けられたいナンパ待ちの女性であっても嫌厭してしまいそうだが、蘭子にはこやかに笑みを浮かべ軽いボディタッチを行っていた。

それに気をよくする男たちはいやらしい笑みを浮かべ、己の体に触れる手を受け入れ蘭子にも自分たちからさりげなく触れていく。そのボディタッチは肩や腕に触れる程度の物から徐々に腹や太ももにまで及んでいく。

「やあん♡ もお……お兄さん手付きエロい〜！」

そういつて蘭子は男の肩を両手で押す。その動きを行うために両腕を寄せたことで二の腕に挟まれた蘭子の巨乳がむぎゅっと形を変えた。それを見た男たちの喉がなる。蘭子の何気ない動き一つ一つが男たちの性欲を刺激していった。

そんな風にイチャイチャとしていた蘭子と男たち。出会ったばかりとは思えない空気を発する三人だったがそこで蘭子が動き出す。

シートの上に置かれていたオイルの容器を手にとって男たちに見せつけるように手のひらの上に容器の口からトロリと垂れ落ちたオイルを溢し、それを胸に押し付けゆっくりと、いやらしく塗りたくっていく。

「ああん——.ちょっと冷た〜い♡」

「うわ〜、蘭子ちゃんエッロ！」

「黒ギャルにオイルのテカリとかマジやばいわ〜。こう……下半身にムラムラっとくるもんあるね！」

黒い肌の上を、瑠璃色のオイルが滑っていく。オイルが塗り広げられたことで蘭子の黒い肌はテカリ太陽の光を反射してツヤツヤと光っている。

もはや輝いているといっても語弊がないオイルのテカリを蘭子は塗り広げていき、そして体をくねらせながらシートの上に寝そべて男たちに告げた。

「ねえ。あたしにい、オイル塗ってくれない？ おに一さんたち♡」

「え？ マジで？」

「蘭子ちゃん積極的〜！」

男達は諸手を挙げて叩きたくなるような興奮そのまま口笛を吹き、我先にとオイルの容器を取ってその厳つい手にヒンヤリとしたオイルを零す。

オイルが両手に満遍なくまぶされた二人の手が、ニヤつく笑みと共に蘭子の背中と太ももにペタリと触れた。

「あんっ♡ もお、触るんなら言ってよねえ。冷たくてビックリしちゃうじゃん♡」

「ゴメンゴメン！ その代わりめっちゃ気持ちよくするからさ！」

「そーそー！ 蘭子ちゃんのことヒーヒー言わせてやっからよ！」

きめ細かく、滑らかな黒い肌の上を男達の手が弄っていく。その手つきは非常に慣れたもので、蘭子にマッサージを受けているかのような心地よさを感じさせた。

「へえ～、意外にうまいじゃん♡」

体の柔らかさを感じるように揉みほぐし、そこから熱が広がっていく。広がった熱はぬるま湯のように程よい熱だ。

いい意味で予想が裏切られたと蘭子はうつ伏せのまま、腕を組んでその上に顎をおいて目を瞑り、男達のマッサージを黙って受け入れていた。

「どうよ蘭子ちゃん？ 気持ちいいっしょ？」

「オレら見た目で間違われやすいけどさあ、実はセーじツなんだよね！」

「そうなん、だあ♡ ごめ～ん♡ ウチ、お兄さん達の事勘違いしてたあ♡」

オイルを塗り広げ背中をマッサージしていた手が、徐々に体の全面に回っていく。背中から脇腹へ行き、そして脇腹から乳房の付け根に軽く触れた。

太ももに触れていた男の手も、ふくらはぎや足の裏までオイルを塗り広げると尻たぶに触れていく。そして当てつけのように蘭子の太ももに固いものが押し付けられた。

「なになに？ 蘭子ちゃんはさあ、オレらの事どう思ってたわけよ？」

「言ってみ？ オレら優しいから怒んねーし！」

そう言って男達のがっしりと大きく節ばった手が蘭子の胸や尻をがっしりと掴み、握るように揉みしだいたのだった。

男達の大胆すぎる行動に蘭子は顔を赤らめながらもニヤリと口元を歪めて肩越しに振り返って告げる。

「えっとねえ、女のマン穴にちんぽぶち込んで一番奥で射精したそうな顔してるヤリチン男かなって？ もし間違いだったらウチ、別の人と遊ぶからね〜♡」

ニヤリと笑顔の蘭子の顔は男達にはどう見えたのだろうか、それを見ることができない蘭子には予想しかできないが効果はてきめんだったようだ。

海パン越しの肉棒が、びくりと反応してむくむくと大きく勃起していくのが蘭子には見てわかった。

「アハッ！ お兄さん達のちんぽもうビンビンじゃん！ なになに？ ウチの体に発情しちゃったわけ〜？ こんな真っ昼間からちんぽビンビンとかマジ受ける〜♡」

嘲笑うような蘭子の口ぶりだが期待しているのは彼女も同じ。左手を後ろに伸ばし男の股間に触れて上下にさすり、もう一人の男には太ももを押し付けてその固さと雄々しさを確認し、そして自身も求めている事を相手にアピール。

「なんだ蘭子ちゃんもそういう腹だったわけじゃん」

「いいねえ。こんな可愛くてヤリマンとかハメ甲斐あるわあ〜」

そう言って男達の顔には更なる笑みが浮かぶ。先ほどのように下心は隠されていない。あからさまに表情に出ている獣欲と、この生意気な女をどうやってよがり狂わせてやろうかと言う、食事前の食べ方を考えるような思考のみ。

そして男達の肉棒は既に勃起しきっている。固く、大きく勃起したそれは蘭子の見てきた中でもなかなかの物であり、日本人の平均を優に越している。

これで突かれれば久しぶりに絶頂できそうだと、蘭子が舌なめずりをしたその時、彼女の下半身に衝撃が走った。

「ちょッ……！？ マジでえ……♡」

「へへっ！ 蘭子ちゃんみたいなエロ女にはこーゆーのが効果的なんだよッ！」

下半身をマッサージしていた男の手は蘭子の水着をずりおろし、そしてその節張った大きな指を彼女の肛門に挿入していたのだ。

グリグリと動く指が、オイルの潤滑を得てあっさりすぎるほど根元までアナルに呑み込まれてしまう。

「おいおいユルユルじゃねーか。オイルがあるって言ってもよお、蘭子ちゃんもうこっちも使ってるよね？ ね？ おら、ショージキに言えやヤリマンが！ じゃねーとチンポ挿れてやんねーぞオラッ！」

「ばっ！ お前飛ばしすぎだろww まあでも、蘭子ちゃんヤリマンだしこれくらいじゃバテないっしょ！ んじゃお前はけつマンほぐしとけよ。あとで二穴する時には出来ませんでしたじゃつまんねーし」

「おうよ。この生意気なビッチをオレのテクでヒーヒー言わせてやっからよ！ オメェはこの女オイルまみれにしてテッカテカにしとけ。黒ギャルにオイルとかまじで興奮すんべ！」

「だなww AV女優かよって感じだわ！」

あれよあれよと言う間に蘭子の水着は取り払われていく。そして上半身にオイルをぬっていた男は蘭子の胸を揉みしだきながら大量のオイルで彼女の体をテカらせていく。

その間にも、もう一人の男によるアナル責めは止まらない。むしろ加減が必要ないと分かったことで更に指の動きが加速していった。

「あっ♡ おおっ♡ んん〜♡」

野外でこんな事と思うかもしれないが、ここは人の喧騒から少しばかり離れた場所であり岩場で死角になっている場所。男達も分かっており、そして何より蘭子はこう言う時の為にこの場所に陣取っていたのだ。

アナルの中を乱雑に指がかき回す。指は先ほどよりも増えていて一本からいきなり三本へ。

腸液によってヌメつく肛門内部を乱暴に、ほぐし開発していくように掘り進めていく男の手練手管。顔を真っ赤にして快楽と肛門を責められる羞恥に顔を伏せる蘭子を見下ろしながら男達は乱暴で女体を貪り自分達が楽しむためだけの動きを止めなかった。

「いいッ♡ アナルいいのオ♡ ！？ やっぱ、マジイク！？ こんな乱暴なけつマン責めでツツツ、マジイくっ♡」

きゅっきゅと指を締める直腸が痙攣を開始した。それを直に感じれた男は更に笑みを深め、ここぞとばかりにアナル責めの速度を早めていく。

収縮し、腸液を大量に分泌する直腸は異物である指を押し返そうとしながらも、愛しいものとして受け入れんばかりに蠕動して迎え入れ、男の指を招き入れた。

そして胸の頂にある乳首はビンビンに勃起して腫れあがっていた。その固くなった乳首に狙いを定めたのか、もう一人の男は親指と人差し指で摘み、シュコシュコと上下に扱き上げ、時たまに抓り上げて蘭子を更なる快楽の渦に叩き込んだ。

「オライけやビッチ！ 男漁りに来たヤリマン女がよ！」

「まじで股ユルすぎだろww これはハメ心地良さそうだわ〜！」

「ああ♡ あっ♡ あっ♡ イック！ っく！？ あああああッ♡ もうッ、イックう
ううう♡」

蘭子の体が跳ねる。股座のもう一つの穴から半透明な液体を吹き紫のシートに水溜りを作った。だが蘭子の絶頂は止まらずに肛門の中にある男の指をきゅうきゅうと、ちゅうちゅうと吸いねぶり締め付けた。

弓なりに反った背中が、時間と共に直っていく。蘭子は熱のこもったため息を吐き、振り向き男達に告げた。

「ねえ、岩陰に行こっか♡」